

ちよつとつ話

第一四五号

人間

人間界は六道の上から二番目で、生死流転六道輪廻の世界にいます。地獄界から佛界までの十段階でいえば真ん中の五番目です。極楽に往くにはかなり大変なことを考えて間違いないと思います。人間として生まれ人間らしく死ぬ、一生を振り返り人間としての役割を果たし、聖人と言われなくとも普通の人間、極端に言えば、可も無く、不可も無くで十分だと思ふのです。人間はアートのマンの支配から受け抜け出すことは不可能であり、本質的に自己の犠牲を嫌うのであります。仏道を進む者は名利名聞をもとめず、先徳諸師の教えを守り、常に懺悔し、善行に励み聖人ぶつてはならないと思つています。私は前にも話した様に人間とは間が特に大切であると思つています。先祖から子孫に継承する血統をはじめ、人間として生まれたならば全ての行動所作において、より良き間を取り持つことが出来てしかるべきであると思つています。間が抜けた、間抜けな人になつてほしくないのです。間を司るには愛情はもとより、生かし、生かされる物の生命の尊厳が求められ、人間として守るべき仕草が御座います。それは故意に殺生したり、物を盗んだり、邪淫にはしつたり、悪口をいつたり、欺いたり、二枚舌をつかつたり、恨み怨念をいだいたり、怠けたり、等々の人道に外れた行動を慎むことです。うげぐち、かげぐち、悪口は聞くもいやなら、言うもいやなり。この世は善と悪、正と否に分けられ、何が正しく善なるかの判断を即決できうる智恵を持たなくてはいけません。知識を持つていても、人間は煩惱の火で包まれ迷いの世界に引き込まれやすいのです。世の中を見ても良かれと思ひやつてしまつた事が時を経てみると大きな間違いであつたというような事態に遭遇することがあります。最低でも我々の五感が正しく機能し、智恵を啓発し、判断に狂いの生じないようにしたいものです。したがつて〇、輪が大切になります。昔から言つた事、やつた事は必ず又、我が身に還つてくることを知り、和が輪になつてこそ合せとなりましよう。地獄は苦のみありて樂ひとつも無し。好んで墮ちて行く所ではありません。厭離穢土、欣求浄土です。念仏往生にも所説あり、庶民にはじめて念仏を広めたのは平安期の空也上人で、今に伝わる踊り念仏の元祖です。浄土往生も時下りて臨終念仏ともなれば臨終に臨み十遍の念仏を申せば極楽に往けるとも言われました。でも私は極楽軽視も甚だしいことだと思ひます。人間は生まれれば必ず死ぬわけでも己が行状に関係なく極楽往生できるとなれば世の中荒れ放題、倫理、道徳も無くなり、身の向上も考へる必要も無く、善者は悪者に支配されやすく物事に対し意見はおろか手出しも出来なくなりましよう。こんな世の中真つ平です。我が心に尋ね、我が身体に尋ね、我が目に聞き、我が耳に尋ね、今日も間違ひ無き様にと」個々に明るく、社会も明るく。

二十四年三月一日

善毒界善入院油掛地獄尊